

309) パンク

八重州口にあるさる大きな書店に弊社の出版物を納品に行ったときのことであります。ここは地下2階が倉庫になっているのですが、納品が終わってちょうど止まっていたエレベーターに飛び乗ると、若い女性が乗っていたので、「1階まで乗せてください」と言うと、「どうぞ、どうぞ。」と、大きな台車を隅に動かして私の乗るスペースを作ってくれました。ところが、彼女は「段ボールが本を入れすぎてパンクしちゃって、ほら見てください。」と言うのであります。なるほど、段ボールの下の方が膨らんで、そこから微かに本が見えているのであります。そうこうしている間に、荷物用のエレベーターはノロノロと1階に着いて、小生は待たせてあった車に乗り込んだのであります。ふと股間を見ると、例のようにまたジッパーがかかっているのではありません。なるほど彼女はきっと私の股間を見て、小生を傷つけないように段ボールのパンクにたとえて、ジッパーが開いていることを示唆してくれていたのではありません。イヤー参った参った。それにしてもどうして小生はこうもあそこのジッパーをかけ忘れるのでありましょうか。これを世の中でボケと言っているのだとしたら、小生のボケはチト早すぎるようで心配なのであります。